



営農NEWS



ナシやブドウの秋季防除を必ず徹底しましょう

ナシやブドウの栽培では、果実の収穫が終わった後でも、落葉するまでは、光合成産物が樹体に貯蔵養分として蓄えられる大切な時期です。このため、病害虫の発生によって早期に落葉しますと、翌年の生育に影響しますし、また、その被害部位や落葉が翌年の重要な伝染源となりますので、収穫後も適切な防除を実施することが必要です。次年度の病原菌密度を低下させるためにも、収穫後の耕種的や薬剤防除を徹底しましょう。

特に、ナシ栽培で最も問題となる黒星病は、秋になると葉裏に薄墨色のうっすらとした秋型病斑を形成し、落葉したものが翌年の伝染源となります。また、もう一つの伝染源となる芽のりん片への感染も、10～11月頃の降雨により高まる時期となるため、この時期に十分な防除を行っておく必要があります。

本年は、ナシの生育初期から黒星病の発生が多くなりました。その後、6～7月の降水量が多く、6～8月も発病のやや多い状況で推移しました。その原因の一つとして、昨年は落葉が平年に比べて遅くなったことが、秋型病斑や芽のりん片への感染・進展が遅くまで続き、秋季防除の効果が不十分であった可能性も考えられます。

病害虫発生予報10月号(県病害虫防除所)によると、9月下旬現在におけるナシ黒星病の葉での発生は平年並、また、ブドウべと病の発生は平年並の状況で、いずれも落葉前の秋季防除を徹底し、さらに、落葉を適切に処理するよう呼びかけています。

なお、秋季防除の散布薬剤として、県の病害虫参考防除例によりますと、ナシではオキシラン水和剤(600倍液)、ブドウではICボルドー48Q(50倍液)またはムッシュボルドーDF(500倍液、薬害軽減のためクレフノンを加用)が殺菌剤として採用されています。これと害虫防除としてナシおよびブドウとも、スミチオン水和剤40(1,000倍液)を散布するよう指導されています。

<防除のポイント>

- 1) 薬剤散布にあたっては、十分な薬量を丁寧に散布します。なお、ナシでは徒長枝にも十分散布してください。圃場の周縁部など、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行うことが重要です。SS散布では散布圧を調整して、かけむらの無いように、園内を縦横に走行するよう努めてください。
- 2) 秋季防除は、15～30日間隔に2～3回実施してください。なお、秋の長雨が続けている場合は、11月の落葉前まで実施してください。
- 3) 落葉は集めて園外に持ち出し、土中深く埋めるのが最も望ましいですが、ロータリー耕などで土中にすき込むことでも一定の効果が得られますので、適切に処分します。さらに、園内の季節風の風下で落葉が集まる場所に、深さ30～40cmで適当な幅の溝を掘っておくと、そこに集まった落葉を翌春の3月までに埋め戻しておきます。
- 4) 罹病果や枝梢、巻きつる等は、集めて適切に処分するか、土中深く埋めておきます。

表1 ナシ収穫後における秋季防除の主な薬剤 (令和2年10月6日現在)

薬剤名	希釈倍率	使用時期 / 使用回数	対象病害虫	分類
オキシラン水和剤	500～600倍	収穫3日前まで / 9回以内	黒星病、輪紋病など	F:M1とM4
デランフロアブル	1,000倍	収穫60日前まで / 4回以内	黒星病、輪紋病など	F:M9
トレノックスフロアブル	500倍	収穫30日前まで / 5回以内 (休眠期は1回以内)	黒星病など	F:M3
チオノックフロアブル				
スミチオン水和剤40	800～1,000倍	(無袋栽培) 収穫21日前まで / 6回以内	ナシチビガなど	I:1B

注) 表1および2とも、分類欄にはFRACまたはIRACコードを記載しました(コードが2つは混合剤)。同一分類(コード)は作用点が同じなので、連用は避けてください。

表2 露地巨峰収穫後における秋季防除の主な薬剤 (令和2年10月6日現在)

薬剤名	希釈倍率	使用時期 / 使用回数	対象病害虫	分類
ICボルドー48Q	25～50倍	- / -	べと病	F:M1
ムッシュボルドーDF	500倍	- / -	べと病、さび病	F:M1
スミチオン水和剤40	800～1,000倍	収穫21日前まで / 2回以内	ブドウトラカミキリなど	I:1B

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。

